



目次:

お国自慢(蔡くんの台湾編～その参)	2
好評連載 広岡先生の随筆	3-4
① 翳りゆく大学～(3) 大学再生の糸口	
Evitayaniさん研究室訪問	5-6
7月のお誕生日会(^_^)	6
拗ねています(-_-)	6
豚肉食べ比べ	7
学生実験	7
ニワトリ解体	8
京都バイオ計測センター	8
2024 ASAS-CSAS-WSASAS Annual Meeting in Calgary, Canada	8
お知らせ	9



今年も三輪先輩がアイスをたくさん送ってくださいました！いつもありがとうございます！

ソフトボール大会最終戦！



7月31日にソフトボール決勝戦が行われました！対戦相手は再び生殖生物学分野です。準決勝で敗れた相手であり、皆リベンジに燃えていました。結果は・・・ダララララララララ・・・ダン！7ー5で畜資が勝ちました!!試合の序盤では生殖のスラッガーにホームランを打たれ、リードを許す展開となり、畜資も必死に食らいつきますが、なかなか点に結びつかない状況が続きました。そんな中、シゲ(M1)の守備のファインプレーで空気も一変。徐々に追いつき始め、4ー5の1点ビハインドで迎えた最終回。宏平(B4)、シゲ、ようこさんの活躍で1点返し、5ー5の同点。2アウト2塁でバッターは大石先生。打球は左中間を抜け、ランニングホームラン！見事逆転となりホームベースで学生たちにハイタッチで迎えられました。

試合後は生殖の方達と写真撮影をし、研究室でようこさんが買ってきてくださったアイスをみんなで食べました。いや～格別にうまかった。暑い中みんなよく頑張りました！来年のソフトボール大会も乞うご期待！

(はやた)



お国自慢(蔡くんの台湾編～その参)

台湾との文化の違い

私が日本へ来てから、一年五か月が経ち、日本の生活にも慣れてきた。しかし、やはり台湾の文化とは異なる点もある。今回は、私が発見した3つの文化の違いについて紹介する。

①餃子は主菜

私の国で、餃子は主食として食べられるので、日本の定食屋に行き、初めて餃子定食を見たときに驚いた。その違いが非常に気になるので、ネットで答えを探した。まず、中国または台湾の餃子の特徴は小麦から作られた厚い皮とあまり醤油やニンニクなどの調味料を入れない中身を組み合わせる。そして、餃子は主にお湯に茹でるため味が薄いので、主食として非常にふさわしい。



一方、日本の主食の米は古くからずっと変わらないので、餃子は主食としての可能性がほとんどない。かわりに、本来の厚い皮をうすくして、中身にいろいろな調味料を入れ、フライパンで焼く、濃い味の主菜になる。

今回の文章を書く前に、餃子定食を一回しか食べたことがなかったが、その文化の差異を調べたら、また食べたいという気持ちになるかもしれない。

②歩行者の天国

日本に来たばかりの頃、車が曲がる際に先に歩行者を優先するということに驚いた。台湾において、多くの運転手や歩行者は交通マナーを守らないことが深刻な社会問題である。そのため、私の国は常に「歩行者の地獄」と呼ばれる。

そのような事態になってしまったのには多く原因がある。例えば、まず、大勢の運転手は歩行者にあまり道を譲らないため、信号が青であっても、ぶつけられる可能性がある。一方、飲酒運転も深刻な問題である。飲酒運転の人で再犯の人が多いのは、台湾で飲酒運転に関する処罰はほかの国より厳しくないためだ。歩行者の歩きスマホ問題について、ある人は歩いている時あるいは自転車を運転中にスマホを使って、道中の状況に注意しなかったため、事故が発生するケースが多い。



つまり、日本は歩行者にとって交通が非常に安全なので、半年ごとに台湾に戻るたびに、台湾の交通の悪さに不慣れさを感じるようになっている。

③食事の挨拶

この3点目については、最近アルバイト先の日本人の同僚と話しているときに気づいた。小さい頃から日本のドラマやアニメを通じて日本文化に触れてきたので、日本人が食事前に「いただきます」と言い、食事後に「ごちそうさまでした」と言うことに対して特に慣れないに感じることはなかった。しかし、台湾人にもこの習慣があるかどうか尋ねられたときに、台湾ではこの習慣がないことに気づきました。

文化の違いとはいえ、食事の前後に両手を合わせて食べ物に感謝の気持ちを示すことは、とても意義があることだと思う。ラーメン店で食事を終えたときに「ごちそうさまでした」と言うことがとても温かみを感じさせてくれた。だから、この食事の挨拶の言葉は、台湾に帰っても使い続けたいと思っている。



蔡くんのお友達が持ってきてくれた台湾スナック、いただきます！

好評連載 広岡先生の随筆

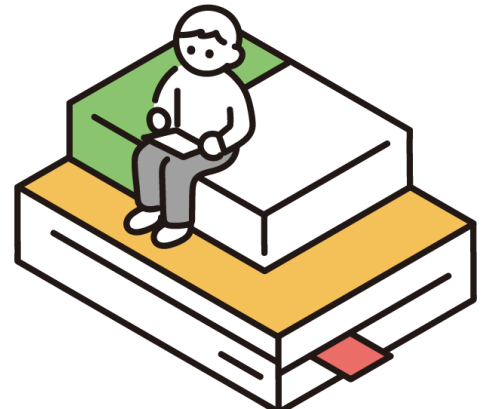
⑤ 翳いゆく大学～（3）大学再生の糸口



これまで「翳いゆく大学」編において大学における研究力低下、教育における問題点について述べてきた、そこで、本稿ではこれらの問題をいかに解決すべきか、あるいは良い方向に導くことができるのかについて私見を述べたいと思う。これらの問題は私に言わせてもらえば、どうしようもない絶望的な話ではなく、政治家、教育官僚、大学関係者が現状を把握し、意識を変えるだけで、ある程度は解決に向かわせることができるのではないかと考えている。ただ、このような人種の人々にとって、自分たちのこれまでの誤りを認め、意識改革を実行することは最も苦手とするところである。

まず、研究力のほうであるが、これについては何よりも研究の基盤となる運営交付金を20世紀並みに戻すこと、そして削減され続けた教員（研究者）の定員数、それをサポートする事務職員の定員数を以前の水準に戻すことである。そもそも学生数が減少していないにもかかわらず、研究費と人員を減らして研究力を維持せよということ自体、無理で無謀な話である。そして、このような政策の結果、優秀な若手を大学に残すことができず、日本の大学の研究力に大きな損失を招くこととなった。20世紀後半にこのような意思決定をした方々は、現在の大学の惨状を見て何を思うのであろうか。

研究費については、まず、認識してほしいことは、文系と理系によって必要な研究費に大きな差があり、また同じ理系でも研究テーマと研究対象によって必要な研究費が大きく異なる点である。そして、何よりも知っておくべきことは、必要な研究費と研究レベル、社会貢献との間にははっきりとした関係のない点である。このことは、科学的にも証明されており（参考文献1）、特に日本では少額の研究費を多くの研究者に配分したほうがトータルには研究成果が向上することが、実際の研究費の分配額と成果に関する実データより証明されている（参考文献2）。研究テーマや研究対象によっては当然、実験設備や試薬などの消耗品費に費用がかかり多額の研究費を要する一方で、ワトソンとクリックのDNAの二重螺旋構造の発見や益川博士の理論などのノーベル賞に結びついた理論研究は、研究者自身の発想力や奇跡的な「思いつき」によってもたらされるもので、研究費はほとんど要さないと考えられる。また、不謹慎な見方であるが、研究費などの投資に対する研究成果を生産物と見なしてコスパを考えれば、一般的に理論研究が最もコスパが良く、次いで情報系が続き、実験を伴う研究はコスパの悪い研究といえる。しかし、理論研究が価値を持つのは、その後に実験によって理論の正しさが実証されての話である。ただ、現在、最悪な状況であるのは、なぜか研究費を多く獲得した研究者が評価される風潮があり、研究費の獲得合戦となり、その結果、研究費獲得のためのホラ吹き合戦の様相を呈し、人によっては、自分は「何々億のお金を使った」と自慢する研究者までいる始末である。研究において、最も重要なことは、研究成果の新規性とオリジナリティー、そしてそれらの学術界や社会への貢献である。もっとも、文系理系を問わず、研究成果の発表や旅費はほとんど等しく必要で、その意味でもこのような研究の基盤となる運営交付金は多くの人に幅広く配分すべきである。



好評連載 広岡先生の随筆

⑤ 翳いゆく大学～（３）大学再生の糸口

次に教育であるが、私は、現在の大学において教育力の向上に必要なことは、文理融合と教養教育の強化だと考えている。文理融合という言葉自体は、近年、よく耳にするが、私がここで言いたいのは、文系研究者と理系研究者の共存する組織（学部や研究科）を構築することではなく、研究者個々人が文系理系の両方の素養を持つことである。その必要性を述べるのに、ここでは哲学を考えてみたい。一般に哲学と言えば、哲学の研究者は文系で人文科学に属し、学部では哲学の研究室は文学部に設置され、最も文系的な学問だと考えられがちである。ところが、歴史を考えれば、古代ギリシャのアリストテレスやその後の多くの科学者は、科学者であると同時に哲学者でもあり、実際自然科学を突き詰めてゆけば、多くの研究者は自然の法則性や神秘性に直面し、哲学的な思考の必要性、場合によって、自然の摂理の神秘性に宗教的な何かを感じざるを得なくなる。最近の事例で言えば、畜産学分野で開発された体細胞クローン技術は、生命科学史に残る最高の技術であったにもかかわらず、体細胞クローン技術によって生産された家畜からの畜産物が消費者に受け入れられず、研究そのものが消滅してしまうこととなった。これなどは当時の先端研究者が生命倫理の問題を重視し、生命倫理に関することを学んで、消費者にしっかりと説明すべきだったと思う。体細胞クローン技術そのものは遺伝子操作などを一切行っておらず、現在の遺伝子編集技術よりもずっと「自然」であったと思う。それにもかかわらず、消費者が拒否反応を示したのは、ひとえに説明不足の要因が大きいと思っている。以上のように、自然科学者にとって哲学的な思考は、特に生命科学に携わる研究者は持つべき素質・教養であると確信している。本稿では、わかりやすい例として哲学を取り上げたが、他の人文科学、社会科学の研究から自然科学者が得ることは多いと思う。逆に、文系研究者が理系の学問を知ることによって、より研究の幅を広がると思う。



現在、このような文系、理系様々な学問を直接に学べる場が、まさに大学における教養教育で、言い方を変えれば、このような教養科目を受講できる機会のあることが大学(University)の最大のメリットである。この問題についてはまだまだ書きたいことがあるが、文字数にも限りがあるので、ここで終えることにするが、いつかの機会にもっと掘り下げて書きたいと考えている。

広岡博之

参考文献1

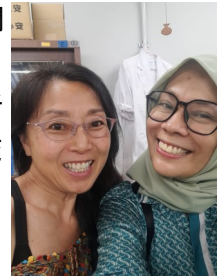
Fortin J-M, Currie DJ. 2013. Big science vs. little science: How scientific impact scales with funding, PLoS ONE 8(6): e65263, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0065263>

参考文献2

Ohniwa RL, Takeyasu K, Hibino A. 2023. The effectiveness of Japanese public funding to generate emerging topics in life science and medicine. PLoS ONE 18(8): e0290077. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0290077>

Evitayaniさん研究室訪問

インドネシア アンダラス大学の講師、Evitayani先生が7/16(火)～7/23(火)まで来日して、当研究室を訪問されました。Evitayani先生は、島根大学と鳥取大学で修士－博士課程を過ごして学位を取得されたので、日本語が少し通じました。また、2009年から当研究室で修士－博士を過ごして学位をとったスリタヤニさん(チチさん)のお姉さんでもあります。今回の研究室訪問では、主に、研究に関する情報交換と、将来に向けての交流協定の打合わせをしました。そんなEvitayani先生からメッセージをいただきました。



Universitas Andalas Engages in International Collaboration with Kyoto University

Kyoto, July 23, 2024 - Universitas Andalas once again demonstrates its commitment to enhancing the quality of higher education through the "Enhancing Quality Education for International University Recognition (EQUITY) Project." This program involves international collaboration with Kyoto University, Japan, and is executed by one of Universitas Andalas' esteemed lecturers, **Dr. Ir. Evitayani, S.Pt., M.Agr., IPM., ASEAN. Eng.**

Dr. Evitayani, who is also a Lecturer in the Department of Animal Nutrition and Feed, has been assigned to participate in and carry out cooperation and international journal publication activities from July 15 to July 23, 2024, at Kyoto University. In addition, she will be conducting an International Faculty Exchange program with the theme "Lecturer Tropical Leguminosa." This program aims to enhance the international recognition of educational quality at Universitas Andalas.



Dr. Evitayani discussing with Professor H. Kumagai

This collaboration encompasses various activities designed to enhance academic and research capabilities. One of the main focuses is on international journal publication, which is expected to boost academic reputation and open up further collaboration opportunities between the two universities.

"With the EQUITY Project, we hope to raise the standards of education and research at Universitas Andalas while strengthening international relations with Kyoto University," said Dr. Evitayani.

Dr. Evitayani has also successfully submitted a reputable international journal indexed in Scopus Q2 through collaborations with authors from various universities, both domestic and international. The collaborating authors include H. Kumagai (Kyoto University), F. Agustin, A. Amir, and Hellyward (Universitas Andalas), A. Fariani (Universitas Sriwijaya), and Bela Putra (Universitas Muara Bungo). This activity is expected to provide direct benefits not only to the participants but also to the entire academic community of Universitas Andalas. The EQUITY Project is funded by the 2024 budget of Universitas Andalas, specifically through the Enhancing Quality Education for International University Recognition (EQUITY) Project funds.

Upon completing this assignment, Dr. Evitayani will submit a written report on the outcomes and achievements of the activities. This report will serve as the basis for evaluating and developing future international cooperation programs. Through this collaboration, Universitas Andalas remains committed to improving the quality of higher education and expanding its international network to achieve global recognition and excellence.



Evitayaniさん研究室訪問(続き)



In addition to this activity, Dr. Evitayani is also actively involved as an organizer of various community service programs. Dr. Ir. Evitayani, S.Pt., M.Agr., IPM., ASEAN. Eng, a renowned academic from the Faculty of Animal Science, Andalas University, recently launched a community service program titled "Silase Rumput Gajah dan Amoniasi Jerami sebagai Pakan Ternak Sapi Potong untuk Meningkatkan Perekonomian Masyarakat di Kelompok Tani Banda Gadang, Padang Pariaman." This program is conducted under the International Community Service (PKM-I) scheme.

Based on Decree Number 94/UN16.19/KPT/PM.03.00/2024 dated July 15, 2024, and Contract Number 1/UN16.19/PM.03.03/PKM-I/2024 dated July 17, 2024, this program aims to introduce and implement the technology of elephant grass silage and straw ammoniation as alternative feed for beef cattle. This initiative is expected to improve the quality and quantity of cattle feed, which in turn can enhance the productivity and welfare of farmers in the Banda Gadang Farmers Group, Padang Pariaman.

Through this community service, Dr. Evitayani focuses not only on knowledge transfer but also on enhancing the capacity and skills of farmers in managing cattle feed effectively and efficiently. Thus, it is hoped that this program will have a significant positive impact on the local community's economy.

This initiative is part of Dr. Evitayani's commitment to supporting and advancing the livestock sector in Indonesia, particularly in the context of rural community development. Dr. Evitayani also affirms her commitment to completing this program in accordance with the terms stipulated in the contract and taking full responsibility for the reports and outputs produced.

7月のお誕生日会(〜♪)

7月30日に大石先生と私、高桑の誕生日パーティーを開いて下さいました。

塚原先生が大石先生リクエストのチーズケーキと、高桑リクエストのシフォンケーキを作ってきて下さいました！チーズケーキはとても濃厚で、でもパクパクと食べてしまえ、シフォンケーキはふわふわで、刺したフォークからもそのふんわり感が伝わるほど柔らかくどちらもお店で出てくるような美味しさに感動しました。美味しいケーキを作ってきてもらったこともびっくりですが、研究室で誕生日を祝ってもらえることにまず驚きでした。また、その様な会に学生もすぐに集まる、本当にアットホームな研究室だとしみじみ感じました。

心もお腹も豊かになる一日でした。皆様、ありがとうございました！！



拗ねています(ー_ー:)

去る7月5日(金)に、6月に沖縄からやってきたヤギの去勢をしました。夏の実験に間に合うようにと、生後6か月に達した2頭が手術台上に上がりました。今年の4月に初めて去勢手術を見た4回生も、今回は少し慣れて落ち着いてお手伝いできたようです。一方、慣れないのはヤギのほう。生まれて初めて痛い目にあわされて、もう誰とも目を合わせたくありません。こちらに背中を向けて、めっちゃ拗ねていました。私も好きで痛い目に合わせるんじゃないのに拗ねられて、いつも心がちょっぴり痛みます。手術後の抗生剤投与の際には、ご機嫌取りにいつも新鮮な草をご褒美に持って行くのです。ごめんね～。(よ)

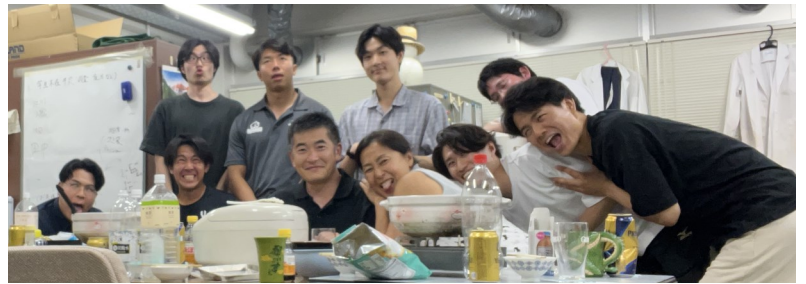


豚肉食べ比べ



7月9日（火）のゼミに出席された畜産資源社会人博士課程の寺田さんが、その夜に研究の題材としている金華豚の交雑豚肉を持ってきました(^^♪

早速みんなで市販のモチ豚を買い出しに行って、しゃぶしゃぶで豚肉食べ比べ！それぞれそこそこお値段の張る豚肉とあって、どれも美味しそうでしたが、赤身の色や、脂肪の入り方に結構差がありました。中でも金華豚の交雑お肉は、一番臭みがなく脂身もあっさりしていて、豚肉の苦手な私でも美味しくいただきました。さて、「ちょっと買いすぎじゃない？」と思った大量の豚肉は、瞬く間にみんなの胃袋へと消えてき、ビールも無くなって大ペットボトルのトリスへ移行…みんな幸せいっぱい腹いっぱいの一日になりました。寺田さん、ありがとうございました♪ (よ)



学生実験



今年前期の学生実験(応用動物科学実験および実験法I)が無事終了しました。畜産資源学分野では、「異なる飼料を給与したメンヨウの第一胃発酵の解析とプロトゾアの観察」「小型反芻家畜における体内寄生虫とその対策方法」そして「雪印メグミルク工場見学」を行いました。いつも通り、畜舎でヤギやヒツジと戯れ(サンプリング)、顕微鏡を使って、プロトゾアや寄生虫の卵を観察しました。雪印メグミルクの工場見学は今年が初めての訪問です。担当の方はとても慣れていて、事細かに説明して下さいた上に、学生さんからのたくさんの質問にも丁寧に答えてくださいました。お土産もいただいて楽しかったです(よ)



ニワトリ解体



今年度の江川くん(M2)の実験は、オオシロアリの蟻土を養鶏の敷料に用いる可能性をin vitroで探っています。ご協力いただいている京都府畜産センターさんには、ブロイラーを飼育していただいて、その糞を実験に利用しているのですが、そこで役目を果たしたブロイラー達のお肉(食鳥処理センターで食用処理)が畜産資源と動物栄養両研究室に届きました。

なかなかさばくチャンスが無い丸鶏ですが、畜産資源にきたなら、やっぱりこれは技術として身に付けておいた方がいいでしょう、ということで、早速解体開始です。両モモを外して、ムネ肉を骨から外し、ボンジリやセセリも取り分けましょう。自信がなければ丸焼きに？

まだ、冷凍庫に数羽残っているようなので、ぜひ次の機会にローストチキン？サムゲタン？にして食べましょう。

京都バイオ計測センター

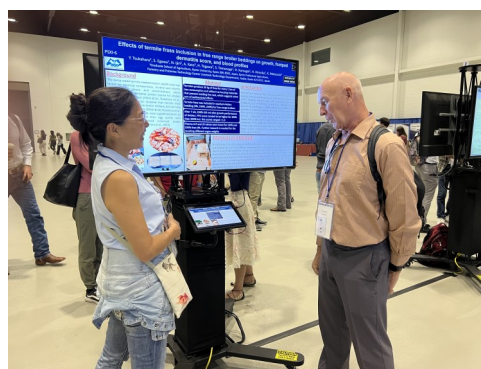
京都の五条通り、JR丹波口駅の近くに京都リサーチパークという京都のサイエンスパークがあります。そこにはたくさんの分析機器があり、機器の使い方を教えてくれたり、分析に使わせてくれたりします。7月16日(火)にこれからガスクロマトグラフを利用する学生さんたちが研修を受けに行きました。講師は京都バイオ計測センター(元京都府立大学)の市原謙一先生で、先生は脂肪酸分析の国内第一人者、「脂肪酸分析は意外と簡単」という論文も出されています。今回の講習会で学生さんたちは、共同研究をしている養鶏会社の方や、お父さんつながりで子供のころから知っていた「おじちゃん」研究者の方とたまたま一緒に受講することになり、

世界はせまいなあと実感しました。研修を受けてエキスパートになった皆さん、自分のサンプル分析も頑張ってくださいね～



2024 ASAS-CSAS-WSASAS Annual Meeting in Calgary, Canada

7月21日から25日まで、カナダのカルガリーで開催されたアメリカ畜産学会に出席してきました。会場はCalgary TELUS convention Centreという、町の中心に立つ携帯会社TELUSのイベントホールでした。現在の日本円安の影響もあって、カルガリーも超物価高です。オフィシャルホテル(一泊約28,000円！)に宿泊するだけで、渡航予算を全部使い切ってしまうそうだったので、会期中は町はずれの比較的安いホテルから、車で通って参加することになりました。今回の発表演題は「Effects of termite frass inclusion in free range broiler beddings on growth and blood profile」ということで、オオシロアリの蟻土を平飼いブロイラーの敷料へ用いた効果について発表してきました。カナダ開催ということもあってか、参加者も発表者も少なかったように思います。昆虫飼料について発表があったのは2題で、いずれもペットフード(犬:イリノイ大学、猫:ワーゲニンゲン大学)への応用についてでした。エクスカーションでは、野生のエルクに間近で出会うことができました。近郊都市のファーマーズマーケットでは、ヤギ乳やヤギチーズがたくさん販売されていました。カナダも記録的な猛暑でしたが、京都はもっと暑いな～



Laboratory of Animal Husbandry Resources

Faculty of Agriculture,
Kyoto University,
Kitashirakawa-Oiwakecho,
Sakyo-ku, Kyoto 606-8502, Japan
TEL: 075(753)6365
FAX: 075(753)6365
<https://www.animprod.kais.kyoto-u.ac.jp/>

GOAT BULLETIN



GOAT BULLETINは、皆様の投稿記事で成り立っています。形式・文字数は問いません。また、読者の方々からのご意見やお問い合わせも大歓迎です。下記のアドレスまでしどし送信してください。

tsukahara.yoko.8v@kyoto-u.ac.jp

お知らせ

岡山の白桃

7月末に畜産資源卒業生の勝俣先輩より岡山の白桃が届きました。岡山では、ご贈答用の白桃が大人気で、ご本人は食べられなかったとか。なんて後輩思いなんでしょう(; ヰ ;)甘くてジューシーな白桃をソフトボール大会優勝後にみんなでいただきました。ありがとうございました！



アメリカ帰りのようこそさん？

7月からフジテレビで放送されている水曜22時枠のドラマ「新宿野戦病院」の主演・小池栄子さんの役どころが岡山弁交じりのブロークンイングリッシュをしゃべる豪快なドクター・ヨウコさん。あれ～ちょっとキャラが被るんですけどって思ったら、着ているオレンジ色のTシャツに*オクラホマ大学 (University of Oklahoma) って書いてある～と大爆笑。誰かこのドラマ見ている人いますか？

*ちなみに、本来のオクラホマ大学はOUと省略されて、オクラホマクリムゾンという濃い赤色がスクールカラー。オレンジ色はお隣のオクラホマ州立大学のスクールカラーです。

編集後記: いろいろ盛りだくさんの7月で、ページ数も沢山になりました。世界中から猛暑や山火事、洪水など気候変動に拍車がかかっている様子が、連日伝えられています。これだけ多くのエビデンスが示されていても、なかなか人々の意識は変えられないものですね。世界が一斉に同じ方向を向くべきところ、各地で戦争が起こっているこの事実、何とかならないものでしょうか？

August 2024

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1 澤田・菊地	2	3 澤田・菊地
4 江川	5	6	7	8 ヤギ(ヒロくん) 去勢	9	10
11	12 入船	13 岩井	14 蔡・菊地	15	16	17 山田
18 岩井	19	20	21	22	23	24 田中
25 江川	26	27	28	29	30	31 菊池